

五旬祭聖体礼儀

第一倡和詞、第十八聖詠、第二調。

救世主や、生神女の祈禱に依りて我等を救ひ給へ。

(詠)救世主や、生神女の祈禱に依りて我等を救ひ給へ。

第一句 諸天は神の光榮を伝ふ。諸天は神の光榮を伝へ、穹蒼は其手の作為を誥ぐ。

(詠)救世主や、生神女の祈禱に依りて我等を救ひ給へ。

第二句 日は日に言を宣べ、夜は夜に智を施す。

(詠)救世主や、生神女の祈禱に依りて我等を救ひ給へ。

第三句 其聲は全地に伝はり、其言は地の極に至る。

(詠)救世主や、生神女の祈禱に依りて我等を救ひ給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン

(詠)救世主や、生神女の祈禱に依りて我等を救ひ給へ。

第1アンティフォン 附唱

救世主や 生神女の祈禱によつて、我等を救いたまえ

——小連禱——

第二倡和詞、第十九聖詠、同調。

ソロ 仁慈なる撫恤者よ、我等爾に「ア ril イヤ」を献る者を救ひ給へ。

(詠) 仁慈なる撫恤者よ、我等爾に「ア ril イヤ」を献る者を救ひ給へ。

第一句 願はくは主は憂の日に於て爾に聴かん。

(詠) 仁慈なる撫恤者よ、我等爾に「ア ril イヤ」を献る者を救ひ給へ。

願はくは主は憂の日に於て爾に聴き、イアコフの神の名は爾を扞ぎ衛らん。

(詠) 仁慈なる撫恤者よ、我等爾に「ア ril イヤ」を献る者を救ひ給へ。

第二句 願はくは聖所より助を爾に遣し、シオンより爾を固めん。

(詠) 仁慈なる撫恤者よ、我等爾に「ア ril イヤ」を献る者を救ひ給へ。

第三句 願はくは主は爾の心に循ひて爾に與へ、爾の謀る所を悉く遂けしめん。

(詠) 仁慈なる撫恤者よ、我等爾に「ア ril イヤ」を献る者を救ひ給へ。

第2アンティフォン 附唱

(詠) 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン

神の独生の子ならびに ^{ことば}言よ

死せざる者にして、我等を ^{すく}救はん為に ^{あまん}甘じて 聖なる ^{しやうしんじよ}生神女、^{えいていどうじよ}永貞童女マリ

ヤより 身を取り、性を ^か易えずして 人と為り、十字架に ^{くぎ}釘うたれ、

死を ^{もつ}以て 死を踏み破りし ハリストス神よ、

聖三者の ^{せいさんしゃ}一として、父 ^{いつ}及び 聖神と ^{せいしん}共に ^{さんえい}讚榮せらるる主よ、我等を 救い給え。

——小連絡——

第三倡和詞、第二十聖詠、第八調。

第一句 主よ、王は爾の力を楽しむ。

讚詞 崇め讃めらるる哉ハリストス我等の神よ、爾は漁者に聖神[°]を遣して睿智者と為し、
彼等を以て世界を漁し得たり、人を愛する主よ、光栄は爾に帰す。

他の詠隊同句を歌ふ。

第1句 主よ、王は爾の力を楽しみ、爾の救を歎ぶこと極なし。

讚詞 崇め讃めらるる哉ハリストス我等の神よ、

第二句 其心に望む所は、爾之を與へ、其口に求むる所は、爾之を辭まざりき。

讚詞 崇め讃めらるる哉ハリストス我等の神よ、

第三句 蓋爾は仁慈の祝福を以て彼を^{むか}へ、純金の冠を其^{こゝべ}首に冠せたり。

讚詞 崇め讃めらるる哉ハリストス我等の神よ、

The image shows a musical score for a hymn, consisting of four systems of music. Each system has a treble clef staff and a bass clef staff, both with a key signature of one flat (B-flat). The lyrics are written in Japanese and are placed between the two staves of each system. The lyrics are:
System 1: あがめ^ほ讃めらるかな ハリストス 我等の かみよ
System 2: なんじは^{ぎよしゃ} 漁者に 聖神を^{つか} 遣わして^{えいち} 睿智者となし
System 3: かれ等を以て 世界を^{ぎよ} 漁しえたり
System 4: ひとを愛する主や、光栄はなんじに帰す

聖入の句 主よ、爾の力を以て自ら挙げ、我等は爾の権能を歌頌讃栄せん。

トロパリ+コンダク

讃詞 崇め讃めらるる哉ハリストス我等の神よ、爾は漁者に聖神^oを遣して睿智者と為し、
彼等を以て世界を漁し得たり、人を愛する主よ、光栄は爾に帰す。(楽譜) 前ページ

光栄 今も

小讃詞、第八調 至上者は降りて舌を着しし時、諸民を分てり、火の舌を頌ちし時、衆を一に
集め給へり、故に我等同一に至聖神^oを讃栄す。

至 上 者 は く だ り て
したを みだししとき 諸民を 分か てり
火 の 舌を 分かちしとき 衆を一つに 集め たま えり
ゆえに 我 等 同 一 に 至聖神を 讃 栄 す

(聖なる神の代わり)

単音の時はソプラノ

アミン ハリストスに依って洗を受けしもの

ハリストスを衣たり アリルイヤ

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も 世世に アミン

ハリストスを衣たり アリルイヤ ※「ハリストスによって」

提綱 第八調

其聲は全地に伝はり、其言は地の極に至る。

ホロキメシ 8調

その声は全地に伝わり、その言葉は地の果てにいたる

句 諸天は神の光栄を伝へ、穹蒼は其手の作為を誥ぐ。

聖使徒行實の讀。2:1~11

彼の日五旬節の日至りて使徒皆心を一にして云々

「アリルイヤ」第一調 天は主の言にて造られ、天の全軍は其口の氣にて造られたり。 句

主は天より鑑みて悉くの人の子を視給へり。

福音經はイオアン七章三十七節より五十二節に至る、八章十二節。

節筵の末の大なる日にイイスス立ちて呼びて曰へり云々

「常に福にして」に代へて「イルモス」女王至榮の母たる童貞女よ慶べ云々



女王、至榮の母たる童貞女よ、よろこべ



いかに滑らかなる能弁のくちも 宜しきにかないて



爾を歌う あたわらず 如何なる智恵も



爾の産を 悟るを得ず



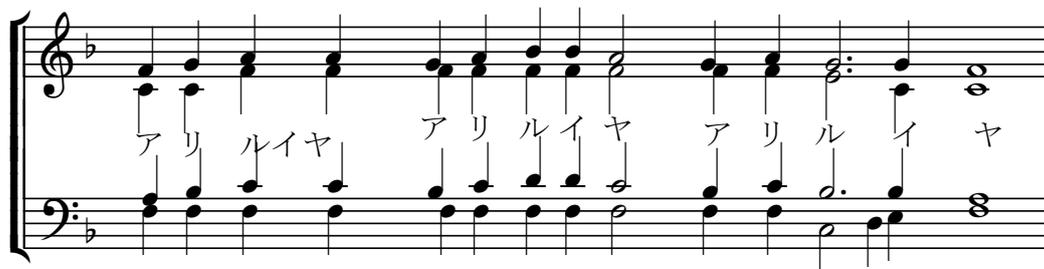
故に我等心をひとつにして 爾を讚榮す

領聖詞 願はくは爾の善なる神^o は我を義の地に導かん。「アレルイヤ」。三次

領聖詞 聖詠142:12



ねがわくは爾の善なる神^o は我を義の地にみちびかん



アレルイヤ アレルイヤ アレルイヤ

第四百十二聖詠 抜粹

主よ、我が禱りを聆き、爾の眞実に依りて我が願いに耳を傾けよ、爾の義に依りて我に聴き給え。

爾の僕と訟えを為すなかれ、蓋凡そ生命ある者は、一も爾の前に義とせられざらん。

我^{いにしへ}古の日を想い、凡そ爾の行いしことを考え、爾が手の工作を計る。

我が手を伸べて爾に向かい、我が^{たましい}靈は渴ける地の如く爾を慕う。

(我に爾の旨を行うを教え給え、爾は我の神なればなり、願わくは爾の善なる神は我を義の地に導かん。)

主よ、爾の名に依りて我を生かし給え、爾の義に依りて我が^{たましい}靈を苦難より引き出し給え、

爾の憐れみを以て我が敵を滅ぼし、凡そ我が^{たましい}靈を攻むる者を^{たいら}夷げ給え、我は爾の僕なればなり。